

れない人生を懸命に生きる一人の人間として描こうとした。イスラームという宗教の精神性を代表してきたスーフィズムを、日本文化との接合点から新たに翻訳し、人生を葛藤しながら生きようとする人々の営みとして捉え直そうとする本書は、その今日的諸相を読み解くうえでの重要な示唆を与えてくれている。

(澤井 真 天理大学人文学部宗教学科准教授)

須永恵美子・熊倉和歌子(編)『イスラーム・デジタル人文学(U-PARL 協働型アジア研究叢書)』人文書院
2024年 272頁

技術進歩の恩恵を人文社会科学の研究に取り入れることで、学問の新たな地平を切り拓こうとする試みが、とくにコロナ禍を経て勢いづいている。そのひとつが、デジタル技術の諸成果を活用したデジタル人文学(英語圏ではデジタル・ヒューマニティーズと表記されることが多い)であり、これをイスラーム(地域)の研究に応用するかたちで書かれたのが本書である。デジタル人文学では、文字、画像、動画、音声など様々な素材からデータを抽出し、それを活用することで研究が進められる。データを用いた研究として一般的にイメージされるのは、従来では経済学や政治学などの社会科学の研究であった。しかし、最近では、それが文学や思想研究、歴史学などの分野にまで及ぶようになった。データといかに向き合うかが、これからの研究者にとって避けては通れない問題となっている。

本書は、デジタル人文学とは何か、またその手法を取り入れることで従来のイスラームに関する研究を、どのように変えることができるのかを、具体的手法の紹介を交えながら分かりやすくまとめた良書である。本書には社会科学の論考も含まれており、全体をデジタル人文学として括るのが適当かどうかは一考の余地がある。ただし、このことは、本書がデータの時代を迎える(あるいは既に迎えた)イスラーム(地域)研究のあり方を、分野の垣根を越えて広く描き出すことに成功していることの証でもある。とくに、これから研究を始めようとする初学者や、既に研究を始めてはいるが、新たな手法や方法論を知りたい研究者にとって、本書は「次世代型」の研究マニュアルとなるだろう。

本書に収められた論考とコラムは、どれも最新の研究動向に通じた若手・中堅の研究者により著されている。そのため、紹介されている手法やアーカイブなどは、研究を進めるうえで役立ちそうなものばかりで、いろいろと使ってみたい誘惑に駆られる。編者の須永恵美子氏と熊倉和歌子氏は、現地調査や一次資料を駆使した研究に定評があり、また他の執筆者もイスラーム(地域)研究の第一線で活躍する研究者である。そのため、本書はデータ利用のノウハウを単に説くだけでなく、データをよりよく活かした研究を行うために、データ以外のいかなる点が重要になるのかも教えてくれる。デジタル技術の何が、どのように従来のイスラーム(地域)研究を変えるのかを理解するうえで、さらには広くデジタル時代における人文社会科学の研究を考えるうえで、是非とも一読をおすすめしたい。

*

本書は、全9章構成である。全体に関わる第1章や、イスラームの聖典と技術との史的展開を論じた第2章は、本書を通読する際には最初に目を通しておくのが望ましい。しかし、それ以外の章の内容は独立しているため、興味のある章から読み進めて構わないだろう。また、本書を実践的な研究マニュアルとして使う場合には、特定の章をピックアップして読むのも良い。各章の終わりにはコラムが付されている。どれも充実した内容で、コラムについても取り上げたいが、以下は章に限定して紹介する。

第1章「イスラーム・デジタル人文学とはじめ」(須永恵美子)は、本書全体を貫くテーマである「デジタル人文学」や、それをイスラーム(地域)研究に応用した「イスラーム・デジタル人文学」について説明している。欧米や日本でのデジタル人文学の展開、また用いられる手法や資料、さらに近年の図書館のデジタル化に向けた取り組みなどが簡潔にまとめられており、全体の内容を把握するのに役立つ。同章を読むことで、デジタル人文学の手法をイスラーム(地域)研究に取り入れることの利点や、期待される成果などを端的に知ることができる。

第2章「デジタル化される聖典——クルアーンとハディースの音と文字」(竹田敏之)は、本書に歴史的な

深みを与えている。イスラームの聖典であるクルアーンや、第二の聖典とされるハディース(預言者言行録)を考える際には、単にテキストとして書き下された文字やその内容を理解するだけでは不十分であり、音との関係を踏まえることが重要である。著者は、その理由や、またイスラームの聖典が筆写や印刷の時代を経て、現在に至る過程を丁寧に説明している。聖典のデジタル化をめぐる近年の状況や、またデジタル化が聖典へと与える影響、さらにはその宗教的・社会的な意味の考察が興味深い。

第3章「閉じられたテキストを世界に向けて広げる——デジタル人文学とイスラーム法学のテキスト研究」(塩崎悠輝)は、テキストと人文学というやや大きな視点から考察をはじめ、そのうえでテキストのデジタル化がイスラーム法学へと与える影響を論じている。著者は、ひとつの興味深い事例として「シャリーアソース」プロジェクトを紹介している。現在のデータベースは不完全なものであるが、より完成度の高いものになることで、それが「イスラーム法学研究の欠くべからざるインフラ基盤」(79頁)になりうるといふ。デジタル化とイスラーム法学との交錯が、研究を飛躍的に発展させる可能性に触れている。

第4章「自動文字認識とテキスト化——Transkribusによるウルドゥー語の自動翻刻」(須永恵美子)は、アラビア文字を対象とした自動文字認識(OCR: Optical Character Recognition)の発達を述べたうえで、実際に手書きテキストを抽出するソフトウェアを使ってウルドゥー語(アラビア文字で書かれる)の手書き文章を翻刻している。現時点で、自動翻刻は完璧とは言えず、人の手を借りた確認作業が不可欠であるとの結論を著者は導き出すが、その精度の向上・技術的な進歩には瞠目させられる。最後に、著者は、自動翻刻の技術が今後進むことによる、研究への影響と、その革新的意味についても考察している。

第5章「計量テキスト分析——文字データを量的に解析する方法」(山尾大)は、とくに政治学の分野で注目度の高い計量テキスト分析の手法を用いて、イラクの日報紙の報道傾向を分析している。アラビア語の分析に使えるツールの紹介からはじめ、データの収集・コーパスの作成・前処理の方法、さらにそこから考察と結論に至るまでのプロセスを、手順を追って説明している。著者は、量的テキスト分析を真に意義ある分析にするためには、「分析対象となるテキストデータやそれが書かれた言語、そしてその背景にある政治社会や歴史について、分析者が深い知識を有していることこそが、最も重要」(135頁)だと述べる。

第6章「TEIガイドラインとOpenITI mARkdown——マークアップ手法を用いた歴史研究と分析」(熊倉和歌子)は、歴史資料に含まれる全体情報と、分析に用いる個々の情報を切り離さずに記録・分析するための実践的方法として、デジタルテキストへのマークアップ手法を紹介している。現時点で、最も汎用性の高い記法のXML(Extensible Markup Language)ベースのTEIガイドライン(Text Encoding Initiative Guideline)や、それを実践的に用いる方法を丁寧に説明している。そのうえで、近年注目を集める「キタープ」プロジェクトと、そこで用いられるタグ付け方法(OpenITI mARkdown)を、一長一短を踏まえて紹介している。

第7章「ネットワークを可視化する——近世マグリブの伝記資料を題材に」(篠田知暁)は、デジタル人文学で用いられるネットワーク分析を説明したうえで、16世紀の伝記集を素材として実際にネットワーク分析を示して見せる。ネットワーク分析に使用可能なツールは複数ある。本章では、スタンフォード大学が開発したPalladio(パッラディオ)を利用し、伝記集に書かれた知識人たちの師弟関係のグラフ化や、知識人のネットワークを地図上へと描き出している。従来の研究手法とデータを利用した研究手法との違いや、情報を可視化することの意味、さらに新たな手法が果たしうる役割についての考察が興味深い。

第8章「五線譜のデジタル化——クルアーン第1章第2節を例に」(石田友梨)は、クルアーンの朗誦の一部(第1章第2節)を五線譜に採譜し、音声合成技術を用いて機械に朗誦させる——著者の表現を用いれば「ボーカロイド初音ミクがクルアーンを朗誦する『クルアーン・ミク』を作成する」(204頁)——という実験的な試みを行っている。著者は、本章の結論で、「初音ミクがクルアーンを『歌う』形になることが、どのような反応を引き起こすのか想像がつかなかった」(232頁)としており、現在それを知り合いのイスラーム教徒に聴いてもらい、意見をまとめているところだという。著者の今後の研究が待たれる。

第9章「人工衛星で人間活動を測定する——夜間光画像を利用したラマダーンの分析」(渡邊駿)は、人工衛星から得られる夜間光データを利用した、最新の社会科学分析である。本章では、夜間光データとは何か、それを研究に用いることの利点は何かという基本的な説明から出発し、実際にデータを用い、「ラマダーンの時期には電力消費が増えるかどうか」を分析している。夜間光という新たに利用可能となったデー

タを活用するうえで、それ以外のローカルなデータ・知見が重要であるとの指摘は、他の章とも共通している。夜間光データの持つ可能性を、その課題とともに教えてくれる。

*

データの活用をやみくもに説いたり、その重要性を殊更に強調したりするだけの解説書は、巷に溢れている。しかし、本書がそうした書籍と本質的に異なる理由は、著者らがデータを利用した研究の「いろは」を伝えるだけでなく、データに先行した知識こそがデータ活用の鍵だということを、説得的に示すことに成功しているからだと言えよう。データを活用した研究は、タコつば化が進む既存の研究の壁を打破し、研究上の革新を生み出す力を秘めている。本書は、デジタル人文学の手法を取り入れることで、データを活かしたイスラーム（地域）研究の新たなかたちや、その可能性を示すことに成功している。まさに、データに向き合うことが求められる、これからの時代にふさわしい一冊である。

このように、評者は本書を高く評価するものであるが、同時に、本書はデータ利用の効用を説き、それに基づく研究を促すという目的のためからか、基本的にはデジタル人文学にできることが中心に論じられている。そのため、デジタル人文学自体に見られる特定の傾向や、デジタル人文学が直面する課題については、あまり触れられていない——これは、本書の瑕疵というよりも、書籍の統一性を保ち、読者を混乱させないための適切な配慮と考えられる。とはいえ、（イスラーム・）デジタル人文学の行方や、またデータ時代における研究のあり方を考えるうえで、このあたりは検討しておくのも無駄ではないように思われるため、以下、本書の読了後に評者がデジタル人文学に対して抱いた疑問を3点ほど指摘したい。

まず、デジタル人文学が技術中心主義や、技術に対するある種の楽観に基づいているのではないかということについてである。デジタル人文学では、デジタル化の諸技術を応用することで、分野を越えた方法論の構築や議論の共有、研究の協同の可能性が説かれる。しかし、評者の目には、それが過去にも繰り返された「技術の夢」と重なり合うものに映った。科学技術史やメディア史の研究が指摘する通り、新たな技術がもたらす変化は、技術そのものより、えてして社会の側に規定される。そのため、デジタル人文学が、「音楽の楽譜と同じように言語によらない記号として、普遍性があり、統合ではなく、対話として他分野との共同研究の場を作ることができる」(29頁)かどうかは、受け入れ側のあり方、具体的には研究者側の需要や、そこに投じられる研究費の多寡で決まるように思われる。デジタル技術を応用した研究を実際に進めるとともに、その可能性を冷静に見極めていくことが必要であろう。

また、デジタル人文学自体の耐久性についても問いたい。日本では、1960年代頃から情報化や情報社会についての議論が世界に先行して行われ、人文社会科学分野への情報通信技術の応用も、情報学や情報処理の分野を中心に進められてきたと評者は理解している。近年の演算処理や通信速度の向上、またディープラーニング技術の進化などにより、個々の研究者ができることの幅は、従来と比べて格段に広がった。そのため、デジタル人文学では、人文学の上書きや総合知の創出など、研究上の革新をもたらす力やその新規性が強調される。しかし、仮にデジタル人文学が過去の情報学や情報処理の研究の延長に過ぎず、その一時的な「衣替え」だとするならば、その新規性が失われたあとに、デジタル人文学はいかなるかたちで残るのか。デジタル人文学以前の研究と、デジタル人文学の間にある断絶と連続性についての検討が、その学問の輪郭を見定めるうえで重要になるように思われる。

最後に、デジタル人文学が「データの外側」の部分で、どのように捉えているのかが気になった。デジタル化の技術によって、内容はそれを運ぶ器（メディア）を離れ、分析の俎上に載せられるようになった。物理的制約を離れることで、デジタル人文学が人文学を飛躍させる力を手にしたように思える。しかし、それによって「得られるもの」だけではなく「失われるもの」もありはしないか。例えば、書物において大事なものが書物の外側にあるとするならば、その書物の外側を切り捨てた研究から捨象されるものは何か。本書では、現地の言語や文化、歴史、政治経済などについての確かな知識が、データを扱うに先立って重要になることが指摘されている。ある意味、個々の研究者の知識・技量が、デジタル人文学の不足を補うことで、全体としては優れた書籍になってはいるが、それゆえにデジタル人文学が不得手とすることがやや隠されているようにも思われた。

以上の指摘は、本書というよりも、本書が依拠するデジタル人文学に対して評者が抱く疑問であって、本書自体への批判にはあたらない。むしろ、技術に対する悲観ではなく楽観こそが社会を前進させるとするな

らば、デジタル人文学の手法をイスラーム(地域)研究に応用した本書は、従来の研究を一步も二歩も先に進める可能性に満ちている。そうした書籍が刊行されたこと自体が非常に喜ばしく、執筆者たちの今後の研究が切に待ち望まれる。

(千葉 悠志 京都産業大学国際関係学部准教授)

R. ハーリディー(著)、鈴木啓之・山本健介・金城美幸(訳)『パレスチナ戦争——入植者植民地主義と抵抗の百年史(サビエンティア 71)』法政大学出版局 2023年 xi+313+80頁

『パレスチナ戦争——入植者植民地主義と抵抗の百年史』という題がつけられた本書の著者は、パレスチナ近現代政治史、イギリスとアメリカの中東政策を専門とするパレスチナ人歴史家のラシード・ハーリディー(Rashid Khalidi)である。本書は2021年に英語で刊行された *The Hundred Years' War on Palestine: A History of Settler Colonialism and Resistance, 1917–2017* (New York: Picador) の日本語訳である。ハーリディーはこれまで *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness* (1997)、*The Iron Cage: The Story of the Palestinian Struggle for Statehood* (2006) などをはじめ多くの著書や論考を刊行し、世界的に高く評価されてきたにもかかわらず、彼の著書が日本語に翻訳されたのは、本書が初めてのことである。

ここでいう「入植者植民地主義」とは、イギリスとアメリカが支援したシオニストの運動が、ユダヤ人をパレスチナに入植させるという形態で、先住していたパレスチナ・アラブ人の追放、土地の奪取を行ってきた植民地主義であることを示す。イスラエルとアメリカの広報戦略によって覆い隠されてきたこと、すなわち、パレスチナ人が100年にわたる入植者植民地主義の被害者であり、パレスチナ／イスラエル紛争の本質が植民地主義にあることを明快に論証していることは、本書の多大な貢献といえる。本書の議論によって、これまでネイティブ・アメリカン、南アフリカ人、アイルランド人、満州人などがさらされてきた入植者植民地主義と同列に、パレスチナ人の故郷喪失と離散、離散後の悲劇もまた位置づけることが可能になった点で、価値ある分析といえる。

時の超大国であるイギリスとアメリカの支援を受けたシオニスト運動とその成果として樹立されたイスラエルが、先住者であるパレスチナ人の存在と民族的権利をいかに否定して犠牲にしてきたのか、ならびに、パレスチナ人知識人が強大な権力といかに対峙してきたのかを、本書は丹念な資料分析に加えて、著者の家族史・個人史を基軸にして分析している。著者の家系であるアル＝ハーリディー家は、多くの政治家や法曹、研究者を輩出してきた、エルサレムに出自を有するパレスチナ人の名門の旧家である。以下に詳述するように、本章の冒頭は、オスマン帝国期を生きた著者の曾祖父の叔父ユースフ・ディヤー・アッ＝ディーン・バシャ・アル＝ハーリディーが残した一次資料の分析から始まる。彼は、1899年にシオニズム運動の創始者の一人であるテオドール・ヘルツルと手紙を交わし、パレスチナには以前からそこに暮らしてきた先住者の集団がすでにあり、彼らは居場所を奪われることに同意しないという論点を伝えた。このように、アル＝ハーリディー家の祖先は先見の明があり、大英帝国とシオニストがバルフォア宣言を出す以前からシオニスト運動に立ち向かってきたのである。

本書は、1917年のバルフォア宣言から2017年ドナルド・トランプ米政権の中東政策までの100年間を対象に、パレスチナ人が自身の存在を否定するように設計された、国際的な枠組みを受け入れることを要求されてきた「宣戦布告」に焦点を当てている。本書は、以下の通り、序章と終章に加えて、6章で構成される。

序章

第1章 最初の宣戦布告 1917～1939年

第2章 第二の宣戦布告 1947～1948年

第3章 第三の宣戦布告 1967年

第4章 第四の宣戦布告 1982年